J-STAGE NEWS

J-STAGEニュース

No. 34

電子ジャーナルの最新情報をおとどけするJ-STAGE機関紙

ISSN 1346-1990

2012年12月30日発行

独立行政法人
科学技術振興機構

今号のおもな記事：

- ジャパンリンクセンター（JaLC） DOI付与開始！
- 平成24年度意見交換会のご案内
- J-STAGE Readers' Voice! ご利用者インタビュー 労働安全衛生総合研究所様
- シリーズ学会訪問「公益社団法人　日本薬学会様
- 書誌XML作成ツールのご紹介　～テンプレート登録は一回だけでOKです！～
- STAGEセミナー報告　CrossCheck事例紹介、XML推進協議会講演会

ジャパンリンクセンター(JaLC) DOI付与開始！

ジャパンリンクセンター（JaLC）は、国内外のさまざまな電子ジャーナルサイト等の文献書誌・所在情報を一元的に管理し、それらのリンク関係を中継するシステムです。科学技術振興機構(JST)を含む日本の情報機関による共同運営システムとして、JST、国立情報学研究所(NII)、国立国会図書館(NDL)、物質・材料研究機構(NIMS)により設立されました。2012年3月に国際DOI財団（IDF）により、世界で9番目のRA（DOI登録機関）に認定されました。4月以降、DOI登録システムの構築、運営規則の策定と試行運用を行ってきましたが、いよいよ2013年1月よりJaLCのDOI付与を開始いたします。

これまで、おもに英文誌論文についてはCrossRef DOIを付与してまいりましたが、これを継続しつつ、J-STAGE登載和文誌論文を中心にJaLC DOIを付与いたします。なお、既にJ-STAGEに登載されている論文（旧Journal@rchive含む）でCrossRef DOIが付与されていないものについては、JSTにてJaLC DOIを一括付与いたします。基本的にJ-STAGE登載ジャーナルの全ての論文にJaLC DOIあるいはCrossRef DOIが付与されますので、これによって電子化された情報が相互にリンクされ、流通性・活用度が飛躍的に向上します。

J-STAGE登載誌論文のJaLC DOIの付与については、J-STAGEがJaLCのメンバーとして責任をもって登録・管理しますので、J-STAGE利用学協会様において追加の作業あるいは経費負担は発生しませんが、コンテンツの維持管理にご協力をお願いいたします。なお、当面はジャーナルの論文を対象としてまいりますが、将来的には予稿集への拡大、あるいは図表等への付与を検討いたします。

詳細は、2013年1月に開催するJ-STAGE利用学協会意見交換・説明会においてご紹介させていただくとともに、別途、J-STAGEご利用学協会様に個別にご案内をお送りします。

DOI（Digital Object Identifier）とは：コンテンツのオンライン上の恒久アクセスを保証するために付与する識別子。

ISO（国際標準化機構）により標準化された規格(ISO26324:2012)である。各機関固有のDOI-prefixと個々のコンテンツを特定するDOI-suffixとを/（スラッシュ記号）で繋いで並べた構成。冊子や論文単位だけでなく、任意の図表やページ等、より細分化したレベルで付与することも可能。特定の文字列（http://dx.doi.org/）を前につけることでコンテンツのURLとなる。

DOI-Prefix　DOI-Suffix

DOI の例：10.12341 / johokanri.55.42

アクセスする際のURL

⇒ http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.42

平成24年度利用学協会意見交換・説明会を開催します

J-STAGE利用学協会様を対象にした平成24年度の意見交換・説明会を下記の要領で、東京（1月17日(木) 14:00、JST東京本部（千代田区四番町））・神戸（1月18日（金）13:00、神戸国際会館）の2会場にて開催いたします。今後のサービス方針等についてご説明を差し上げますので、利用学協会のみなさまはぜひご参加ください。詳細はこちらのページからご確認ください。 https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S260_ja.html

J-STAGE Readers' Voice! ご利用者インタビュー

～独立行政法人　労働安全衛生総合研究所様～

J-STAGE 閲覧機能利用機関様へのインタビュー、今回は労働安全衛生総合研究所（登戸地区）の久保田様を訪問しました。労働安全衛生総合研究所様は、平成 18 年に、産業安全研究所と産業医学総合研究所が統合され、現在の組織となりました。事業場における労働災害の予防並びに労働者の健康の保持増進及び職業性疾病の病因、診断、予防その他の職業性疾病に係る事項に関する総合的な調査及び研究を行うことにより、職場における労働者の安全及び健康の確保に資することを目的としています。なお、当研究所は J-STAGE 利用機関として Industrial Health 誌と労働安全衛生研究の2誌の公開もされています。

労働安全衛生総合研究所
主任研究員　久保田　均　様

ー久保田様のお立場と役割について

私は、研究員として疫学手法を用いた労働現場の有害性評価の他、情報検索（サーチャー）、図書室の管理を行っており、さらに英文誌 Industrial Health の編集にも約 20 年携わっています。2005 年ごろ、アーカイブの必要性と研究成果を、特にアジアや中東の研究者に情報を発信することを目的に J-STAGE での論文誌の公開を決めました。現在でも冊子を発行しており、国内だけでなく海外へも無償配布しています。

ーJ-STAGE をどのような形態でご利用になっていますか。

論文誌の登載者としての立場と情報検索側としての立場の双方から J-STAGE を利用しています。J-STAGE に公開してから英文誌の知名度が更に向上しました。また、投稿審査システム(SM)を使い始めてからは投稿数も増加しています。導入前に比べて 2 倍近い投稿がありますが、一方で質に問題のある投稿も増えており、受付前にチェックを行い排除しています。その他には、オンライン化したことで冊子の配布部数を減らすことができ、経費の削減にもつながりました。J-STAGE3 で XML による標準化が図れたことの意義は大きいと思います。私どもでも現在、全文の XML 化を進めているところです。

ー情報検索者側からは J-STAGE をどのように活用されていますか。

Google などの検索エンジンや二次情報検索システムの結果から J-STAGE の本文を閲覧するということよりは、医学・衛生学を中心に特定のジャーナルについて直接、J-STAGE をブラウズする利用の仕方が多い状況です。J-STAGE3 になって詳細検索機能は使い易くなりましたが、略誌名で探せるようになると更にありがたいと感じています。サイトの全体的なイメージも海外の主要電子ジャーナルサイトと比べてほとんど見劣りがしないレベルにあると思います。今後の希望としては、衛生学関連の分野のジャーナルを充実していただけると助かります。

ー研究所の方の J-STAGE に対する感想についてはいかがでしょうか。サービスに関してご要望は出ていますか。

研究所の研究員はほとんど J-STAGE のことを知っています。JST から送られてくる各種の案内や技術セミナーの開催、意見交換会は役に立っているようです。先日の CrossCheck セミナーに私は所用で参加できませんでしたが、今後も是非このような企画を続けて欲しいと思います。

ー最近の学術出版界をめぐる情勢についてはいかがでしょう。

私どもの研究所にも海外出版社からオファーはきますが、容易にメリットは感じられず、出版社の戦略に乗るようなことは考えていません。国内業者でコミュニケーションがしっかり取れることの方が重要と思っています。また、図書購入費の年々の高騰は当研究所でも問題で、特に海外ジャーナルの購入は減っています。

研究所内に昭和 20～30 年代の労働安全を呼びかけるレトロなポスターが展示されていました

ー最後に一言アドバイスをお願いします

JST には、常に広い視野を持ちポジティブに取り組んでいって欲しいと思っています。海外のリンク先がどんどん増えていることは高く評価しています。学術情報を必要としている人にあまねくそれらを提供することが J-STAGE の使命であり、初心を忘れずにさらに上を目指して欲しいと思います。

ーありがとうございました。J-STAGE の情報発信機能の拡充やプロモーションについてさらに検討してまいります。

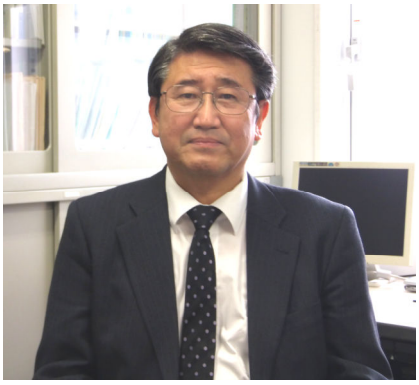
〔シリーズ学会訪問〕～J-STAGE 利用学協会様の声～

［公益社団法人　日本薬学会様］

今回は、日本薬学会の学術誌編集委員会委員長である岐阜薬科大学の森裕志教授を訪問させていただきました。日本薬学会様は、1880 年創立の由緒ある学会で、現在、英文誌2誌と和文誌1誌をJ-STAGEで公開されており、投稿審査システムを導入されています。

ー森先生のお立場についてご紹介お願いします。

2007 年から編集担当理事を務め、学術誌検討ワーキンググループの座長を経て、現在は編集委員会委員長として刊行学術誌の更なる改善に取り組んでいます。



岐阜薬科大学教授
日本薬学会学術誌編集委員長
森　裕志　様

ー貴会の刊行誌についてご紹介ください。

本学会の学術誌は 1881 年の「藥學雜誌」創刊に始まり 1953 年に英文誌「Pharmaceutical Bulletin」(後継誌:Chemical & Pharmaceutical Bulletin)、1978 年に「Pharmacobio-Dynamics」(後継誌:Biological & Pharmaceutical Bulletin)、1999 年に「衛生化学」(後継誌:Journal of Health Science)を創刊しました。掲載論文のオープンアクセスは学会のホームページで 1999 年に開始しました。2011 年にそれまで雑誌毎に設置されていた4つの編集委員会を一つに統合し、査読者の適切な選出と査読の迅速化を目的として部門長(SectionEditor-in-Chief)制度を導入しました。さらに3つの英文誌を2誌に統合してリニューアルし、2012 年 1 月から英文2誌をオープンアクセス誌として J-STAGE で公開しています。また、2011 年 12 月から JST の投稿審査システム(EM タイプ)の利用を開始しています。

ー電子ジャーナル化への取組みと J-STAGE をご利用になってのご感想をお聞かせください。(良い点、悪い点など)

1999 年から薬学会のホームページを用いてWeb 公開を開始しており、当時からWeb 上での公開の必要性を認識していました。J-STAGE で論文公開が可能であることが分かり、2002 年から J-STAGE での全文公開に移行しました。当初、本学会で独自に開発した英文による電子投稿システムの開始によって海外からの投稿が急増しましたが、増加には掲載論文の J-STAGE による公開も強く影響しています。公開機能を無料で利用できること、PubMed 等の海外サイトから直接リンクが張られており容易にフルテキストにアクセスできる点が良いです。ただ早期公開や本公開データの読み込みに時間がかかることがあり、これが難点です。また、アクセス統計は年ごとの取得など、もう少し見やすくなるともっと活用できると思います。一方、セミナーなどの開催による情報提供は有意義です。J-STAGE ニュースは紙媒体でも配布された方が良かったと思います。

ーJ-STAGE3 がスタートしましたが、使い勝手はいかがでしょうか。

移行当初は学会事務局も大変だったと聞いていますが、今はだいぶ落ち着き、公開画面は以前より洗練され見栄えが良くなったと感じます。また、投稿審査システムは学会独自の開発・運用には限界があり、JST のシステムを利用することにしましたが、今は満足しています。ただ本会独自の運用上、手直ししたい部分もあり、運用の中で改善していく必要があると思っています。

ー海外に移る学協会を巡る状勢についてはどう思われますか。また、J-STAGE の果たすべき役割については。

費用、海外からの投稿増加、査読者の依頼のしやすさなど、海外の出版業者による提供内容に良い点があることも確かです。しかし，そこには著作権や一方的な経費の引き上げなど種々の問題点があることも確かです。いろいろな考え方や立場があると思いますが，社会貢献という観点からも JST の強力な支援の元に J-STAGE で掲載論文を継続的に公開していくことが望ましいと考えます。科学技術立国として科学技術情報をオープンに発信する意義は大きく、全体として国の発展に繋がるものと思います。J-STAGE は今後も後退することなく、是非とも継続・発展させていただきたいと願っています。また，学術誌の出版やオープンアクセスの維持には著作権や倫理面，二重投稿や剽窃の防止などにノウハウやスキルが必要です。これらへの対応は容易ではなく，学会の出版活動に対しても JST の強力な支援を切に希望します。

ーありがとうございました。ご指摘については今後も検討し、より使いやすいシステムとなるよう頑張ってまいります。貴学会のますますのご発展をお祈りいたします。

書誌XML作成ツールでJ-STAGEのXMLを作ろう！

テンプレート登録は一回だけでOKです！

2012 年 4 月にリリースされた便利なツールをご存じですか。新システムにより登載データが BIB から XML に移行することになりましたが、「書誌 XML 作成ツール」を使えば、PDF から J-STAGE に登載可能な JATS 準拠の XML ファイルが効率的に作成できます。同じジャーナルにおける論文の体裁（レイアウト）は共通している、という一般的な性質を利用して、最初に一度レイアウト情報（テンプレートと呼びます）をこのツールに登録するだけで、あとは同じレイアウトの論文であれば登載論文の PDF をアップロードし、若干の追記や修正をするだけで次々と XML を作成することができます。今年、内外の研究報告会等でも紹介され反響も大きかったこのツール、現在約 100 誌で利用され、データ作成の効率化に役立てていただいています。操作方法の習得のため、分かりやすい動画マニュアルも用意されています。BIB から移行の学協会様はぜひ一度お試しください。（※現在のところ、ジャーナルの書誌 XML（Bib-J XML）のみ対応しています。）動画マニュアル（β版）はこちらから：https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/development/120309/shoshixml_beta.pdf

J-STAGEセミナー開催報告(1) CrossCheck事例紹介

10 月 12 日、関心の高い剽窃検知サービス CrossCheck に関連する J-STAGE セミナーを開催しました。講演者の John Barrieshi 氏は CrossCheck/iThenticate の開発元 iParadigms 社共同創業者で、学生レポートの剽窃チェックツール「Turnitin」、学術論文の剽窃チェックツール「iThenticate」の開発者でもあり、「iThenticate Improving Academic and Research Integrity」とのテーマで、剽窃検知ソフトウェア開発の背景と学術出版物のクオリティ向上についてお話しいただきました。また事例紹介として、日本コンクリート工学会の英語論文誌「Journal of Advanced Concrete Technology」編集幹事の多田眞作様より、「CrossCheck 導入後の 2 か月で気づかされた剽窃問題の緊急性」と題してご講演いただきました。同会は、今春の J-STAGE CrossCheck の正式導入後早い時期(7 月)に CrossCheck のご利用を開始されており、その体験に基づき、具体的事例についてご紹介くださいました。本講演の概要は次の J-STAGE のホームページで公開しています。
https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S260_ja.html

J-STAGEセミナー開催報告(2) XML推進協議会講演会

11 月 2 日、JST と学術情報 XML 推進協議会との共催による「学術情報 XML 推進協議会設立記念講演会」を開催しました。学術情報XML推進協議会は、日本における学術情報の XML 流通を促進させるため、愛知大学の時実象一教授を中心に設立された団体で、出版社や印刷会社への XML 組版サポート、具体的なXML 組版やソフトウエアの紹介、JATS 規格の勉強会、日本語 XML の規格やガイドライン策定、その他 XML 推進に関する活動を行うことを目的としています。当日は、今年度 2 回目の開催でしたが、学協会関係者の方々を中心に 100 名の方々に参加いただきました。「学術情報XML 推進協議会」についてはホームページを参照ください。http://www.sxpa.jp/

編集後記

♪2012 年のカレンダーも残り 1 枚となってしまいました。2012 年のキーワードは、ロンドン五輪・スカイツリー・iPS 細胞 etc・・・に J-STAGE3！なかなか先行きの見えない不安定な日本情勢ですが（みなさんがこの号を読まれる頃には選挙も終り、政局はどう変わっているでしょうか？）J-STAGE3 は来年もより一層の安定運用を実現して参ります。私は普段は電子ジャーナルスタッフのサポートをしていますが、今後は一層スタッフのお尻を叩いていきたいと思います。クリスマスイルミネーションで街がきれいですね。みなさんの心にも明るい光が灯りますように。（195）

J-STAGE ニュース No. 34　2012 年 12 月 30 日
編集：　独立行政法人 科学技術振興機構（JST）
知識基盤情報部 電子ジャーナル担当
発行人　知識基盤情報部長　大倉　克美
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話　03-5214-8837（ダイヤルイン）
E-MAIL　contact@jstage.jst.go.jp